

## 源氏物語と長恨歌

其八

上野 英二

### 其八 長き世の恨み

『源氏物語』に登場する女君達が、『長恨歌』に彩られることが少なくない中であって、皇妃の密通という重大事件の当事者となり、結果的に光源氏に一代の栄華をもたらすことにもなる藤壺が、いわば物語の最も重要な登場人物でありながら、ひとり『長恨歌』と無縁であることは、『源氏物語』における『長恨歌』の意味の重さを考えるならば、あるいは不可解なことと言うべきかも知れない。

けれども、物語を仔細に読むならば、藤壺を巡る物語の周囲にも『長恨歌』の影を見出すことは難しいことではない。

賢木の巻、桐壺院崩御の後、藤壺は里第に籠っていたが、源氏はまたしても藤壺の元に無理やり忍んでしまふ、その後朝。

明け果つれば、二人していみじきことゝもを聞こえ、宮は、なかばは無きやうなる御けしきの心苦しければ、「世の中にありと聞こし召されむいと恥かしければ、やがて亡せ侍りなむも、またこの世ならぬ罪となり侍りぬべきこと」など聞こえ給ふも、むくつけきまで思し入れり。

「逢ふことの難きを今日に限らずば今幾世をか嘆きつ、経む

御ほだしにもこそ」と聞こえ給へば、さすがにうち嘆き給ひて、

長き世の恨みを人に残してもかつは心をあたと知らなむ

はかなく言ひなさせ給へるさまの、言ふよしなき心地すれど、人の思さむところも我が御ためも苦しければ、我にもあらで出で給ひぬ。

一見この箇所、『長恨歌』とは何の関係も無いように思われるけれども、藤壺の歌に言われる「長き世の恨み」とは、『長恨歌』の歌う「長恨」そのものではないのか。

藤壺は、あまりの衝撃ゆえに思い窮まり、たとえそれゆえに、源氏に永劫の恨みを残すことになったにせよ、二人の関係は断ち切らなければならぬと思うのである。果たして藤壺は程なく出家の決意を固める。藤壺は、源氏の元から絶対的に離れ去って行くのである。死別と生別との違いこそあれ、「長恨」「長き世の恨み」を男に

残して、女が男の元から去って行ってしまうという点では、藤壺の物語は『長恨歌』と同じ展開を見せるのである。<sup>(1)</sup>

『長恨歌』という作品の、名に負う「長恨」の主題を、『源氏物語』は、「長き世の恨み」と翻訳したのではないだろうか。<sup>(2)</sup>

藤つば歌

『ながき世のうらみを人にのこしても

長

恨

かつは心をあだとしらん』

有川武彦『増註源氏物語湖月抄』は、「ながき」という本文の左に「長」、「うらみ」の左に「恨」の文字を傍書する。これをたどれば、まさしく「長恨」となる。

『長恨歌』の結末は、

天長地久有<sub>二</sub>時尽<sub>一</sub> 此恨綿綿無<sub>二</sub>絶期<sub>一</sub>

の二句を以って締め括られる。玄宗皇帝が楊貴妃に先立たれた恨みは、未来永劫、世を代えても永く続いて尽きることとは無い、と言う。窮極のところ、それが「長恨」、「長恨歌」の歌おうとしたことであつた。

藤壺の歌つたのが、その「長恨」、すなわち『長恨歌』結句に言う「此恨」であつたとするならば、対する光

源氏の贈歌、「今幾世をか嘆きつ、経む」の詠もうとしたところは、続く「綿綿無<sup>(3)</sup>絶期」の方であつたと思われる。<sup>(4)</sup>光源氏と藤壺の贈答は、『長恨歌』の結句を巡る唱和の形になっている。

ただ、『長恨歌』の「長恨」に関しては、異説が無いわけではない。すなわち、「恨み」の感情を抱く人物を、玄宗と見るか、楊貴妃と見るか、諸説が世に並び立つのである。

玄宗皇帝の「恨み」とする説。<sup>(5)(6)</sup>

唐帝、楊貴妃に別れし恨みは、長恨歌といふ文に見えたり。

〔十訓抄〕九

玄宗ハ無<sup>レ</sup>力シテ、御貌<sup>カタチ</sup>ヲモ擡<sup>モタゲ</sup>サセ給ハズ、臥<sup>シ</sup>沈マセ給ヒシカバ、今ハノキハノ御有様ヲ、マノアタリニ御覽ゼザリシコソ、中々絶<sup>ト</sup>ヌ玉ノ緒ノ、長キ恨ミトハ成<sup>ル</sup>ニケレ。

〔太平記〕三十七

夫長恨ト云ハ、唐之玄宗皇帝之后、楊貴妃ヲ、馬嵬原ニライテ、奉誅以後、玄宗朝々々々、寤寐之間、貴妃ノ事ヲノミ思ヒ玉ヒ、長クウラミアンジ煩フ事ヲカキシルス、故ニ長恨ト名ヅクルゾ。

〔歌行詩三部鈔〕

一方、「長恨」を楊貴妃の、自らの運命への思いと見る説。

またこの島にたゞ一人帰り来て、すむ水のあはれはかなき身の露の、たまさかに会ひ見たり。静かに語れ憂き昔。シテさるにても思ひ出づれば恨みある。

(謡曲『楊貴妃』)

同じ、楊貴妃の「恨み」としつつも、使者を迎えて、再び玄宗との縁が生じたことを「長恨」とすると見る説。

今汝来求レ我恩愛又生。不レ久 却於ニ人生ニ得レ為ニ配偶。以レ此為ニ長恨。

(『長恨歌序』)

そもそも『長恨歌』の「長恨」とは、誰の「恨み」であったのか。諸説紛々として決するところを見ない。

『長恨歌』の内容を和文で記した、現存最古の文献『俊頼髓脳』も、この点に関しては必ずしも明快ではない。

楊貴妃、しばらく思しめぐらして宣はく、「我、昔、七月七日に七夕あひ見し夕べに、帝、我に立ち添ひて宣はる、事は、棚機、彦星の契り、あはれなり。我もかくあらむと思ふ。もし、天にあらば翼を並べる鳥とならむ。地にあらば枝を交したる木とならむ。天も長く、地も久しく、終はる事あらば、この恨みは綿々として絶ゆる期なからむ、と申せ」と語らひ給ひける。

『今昔物語集』所載の類話も略同だが、「この恨み」とは誰のものか、玄宗のものか楊貴妃のものか明確でな

く、結局のところ、いずれと決し難い。

「長恨」を、玄宗・楊貴妃、両者の「恨み」と取る考え方もある。

玄宗アマリニ貴妃ヲ思ヒタヘカネテ、ウラミナケギテ、貴妃ヲ蓬萊山ヘタツネシメサセ玉フ事ト、又貴妃、方士ニ相マミヘ玉ヒテ涙ヲ流シテナゲキウラミ玉フ故ニ、コレヲ以テ長恨ト名ヅクルトナリ。

（『歌行詩諺解』）

玄宗ト貴妃ト互ニ思フウラミト云モノハ、綿々トシテタルトキハアルマイト云心ゾ。

（『歌行詩三部鈔』）

これは『長恨歌』の結句を、「しかしながら恋人たちよ、たとい天地の尽きるときが来たとしても、あなたがたのこの恋の恨みだけは、綿綿と、ながくながく、尽きはてる時期はないでありますよう」（吉川幸次郎『新唐詩選続篇』）と解する考え方につながる解釈であろう。

けれども、どの解釈が『長恨歌』の結末としてふさわしいのか。当の吉川幸次郎自身、「私は詩の最後に至って、たいへんわかりにくいものに逢着した感じである」、「余韻は嫋嫋として、長い詩の結末にふさわしいことを知るのみである」と、断案を留保している。

古今の大古典にして、愛唱久しい名作でありながら、『長恨歌』は、その根幹のところ定まった解釈を得ていなかったのである。

しかし、事「長恨」に関する限り、白樂天の本意は、玄宗皇帝の「長恨」を歌ったものであったと見る事が出来る。

『新樂府』、「李夫人」。李夫人を失った漢の武帝の嘆きを歌うこの作中、白樂天は、楊貴妃を引き合いに出して、次のように記している。

又不見太陵一掬淚 馬嵬坡下念楊妃 縱令妍姿豔質化為土 此恨長在無銷期

「此恨長在無銷期」もまた「長恨」、『長恨歌』結句「此恨綿綿無絕期」と殆ど同じい。「太陵一掬淚」、「念楊妃」。「太は泰に作るべし。泰陵は唐の玄宗の陵なり」、「こ、は陵名を以て玄宗を指せり」（鈴木虎雄『白樂天詩解』）。歌うところは、玄宗の「涙」であり、玄宗の「念」。したがってこの「此恨」は男の側のそれであった。同じく「長恨」の主題を扱った同じ作者の「李夫人」に徴して、『長恨歌』の「長恨」もまた、玄宗のそれを歌うものであったと考えられるのである。

『和漢朗詠集』の引く、源順の、

楊貴妃歸唐帝思 李夫人去漢皇情

の対句も、その傍証となるであろう。

一方、『源氏物語』の『長恨歌』の理解はいかなるものであったか。この点については、幸いなことに桐壺の巻に、その明証を得ることが出来る。

朝夕の言ぐさに、翼を比べ、枝を交さむと契らせ給ひしに、叶はざりける命の程ぞ、尽きせず恨めしき。

亡き更衣を偲ぶ桐壺帝を叙する場面、『長恨歌』末尾を踏まえた措辞であること、歴然としている。「尽きせず恨めしき」は、結句「此恨綿綿無絶期」のやわらげに他ならない。とすれば、この「恨み」は、女に去られた男のもの。とすれば溯って、『長恨歌』の「此恨」、「長恨」も、玄宗皇帝の「恨み」であったことになる。少くとも『源氏物語』は『長恨歌』の「長恨」をそう理解していた。

したがって、賢木の巻で藤壺が光源氏に対して詠んだ、「長き世の恨み」とは、まさしくその『長恨歌』理解に対応した物言いであったことになる。たとえ自分のせいで源氏に恨みを抱かせることになろうとも、藤壺は、源氏から永久に離れ去ることを願ったのであった。

光源氏の贈歌の方も、女に去られる男の「恨み」を詠んだものに相違なかった。

逢ふことの難きを今日に限らずば今幾世をか嘆きつゝ、経む

「嘆き」と「恨み」とは紙一重、<sup>(8)</sup>前引『歌行詩諺解』には、「玄宗アマリニ貴妃ヲ思ヒタヘカネテ、ウラミナゲキ

テ」と見えている。この「嘆き」も、玄宗皇帝の「恨み」に通ずるものであったと見てよい。

こうして見ると、『源氏物語』賢木の巻、源氏と藤壺の最後の逢瀬、その後朝の贈答、そして藤壺の出家へと展開する物語にも、それと明確には示されないけれども、「長恨」の主題を見出すことが出来るのである。『源氏物語』における、重要な登場人物、藤壺と光源氏を巡る物語にも、「長恨」の主題が見出されるということは、『源氏物語』にとつて『長恨歌』の存在がいかに重大なものであったか、改めて認識させるであろう。

そして同時に、「長き世の恨み」を詠じた藤壺のこの歌は、『源氏物語』にとつて、『長恨歌』の主題が何故に重大なものであったか、「長恨」という主題に『源氏物語』が何を託そうとしたのか、示唆を与えてくれるもののように思われる。

長き世の恨みを人に残してもかつは心をあたと知らなむ

藤壺は歌う。「かつは心をあたと知らなむ」。「あた」は、「あたたき」(桐壺)の「あた」であろう。<sup>(9)</sup>「あたすなわち「仇」、「我に向ひて害をなすもの」の意(北山谿太『源氏物語辞典』)。

『細流抄』は、この歌をこう解釈した。

人にとは、藤壺の身に源氏の恨みを残して、心をあたと源の自ら知るべきと也

たとえ別れることによって「長き世の恨み」を源氏に残すことになったにしても、添いとげられない状況にある以上、それほどの激情も結局それは不幸の種でしかない。それを「あた」と、どうぞ知って欲しい。藤壺は、ただただ一途な源氏の一方的な愛情に対して、ぎりぎりの異議申し立てをしたのであった。<sup>(10)</sup>

別れの後に「長恨」を残すことになるような一途な男の恋心の内に男の身勝手が潜むことを、藤壺の歌は訴えようとしている。そう言えば、『長恨歌』における玄宗の愛情も、桐壺巻における桐壺帝の愛情も、結局は女達を幸せにはしていない。『長恨歌』の玄宗も、『源氏物語』の男達も、限らない愛情を女達に捧げる。そこに纏綿たる恋物語が繰り広げられることになるわけであるが、しかしそれらは、いずれも悲恋に終わる。むしろ、男の側の闇雲な愛情が悲劇を引き起こすばかりなのである。

『源氏物語』が、その変奏を繰り返した『長恨歌』に託そうとしたことも、自らここに明らかなのではないか。「長恨」の恋物語は、確かに哀しく美しい。けれども、そこにあるのは、男の側の身勝手な恋心だけで、女性の立場、女性の思いなど、そこではまったくないがしろにされている。女性の側の立場を無視した、一方的な恋情など、結局女性を不幸に陥れ、ひいては男自身をも嘆かせる結果になるだけなのではないか。

そういう思いを、『源氏物語』は、繰り返す『長恨歌』の変奏に投影しようとしたのではなからうか。肝腎の女性の気持などお構いなしに、ひたすら恋慕するだけの男に対する、それは「抵抗」であり、「不信感」であったと言い得るかも知れない。

迫り来る源氏から逃げるように、やがて藤壺は出家するが、藤壺に限らず『源氏物語』には最終的に出家に至る女君が少くない。これを巡って、円地文子・瀬戸内寂聴の両氏は次のように語っている。

瀬戸内 私が出家してから、一番おもしろいと思ったのは、源氏の女たちはほとんど出家してましよう。

円地 そうそう。

(中略)

瀬戸内 そのたんびに、源氏が「私を見捨てていくのか」とかいつてね(笑)、もうほんとにあわてふためいて嘆く。女は源氏の口先のうまさに乗せられて、言葉のおいしさにいままでたぶらかされていたんだけど、出家するようになってようやく、もうけっこうという感じが出てくるような気がするんですね。

だから、そこに紫式部の源氏に対する、なんていうのかな、抵抗……。

円地 不信心ですね。

瀬戸内 なんかね、そうそう女をばかにしてもらいますまい(笑)、というところがあるのかなあ、と私なんですけどね。

(円地文子・瀬戸内寂聴「光源氏をめぐる女たちの哀歓」『源氏物語のヒロインたち』〔対談〕)

『源氏物語』には、光源氏を巡って多くの女性が登場するが、確かにその多くが光源氏を「見捨ててい」ってしまう。「源氏の女たちはほとんど出家して」行く。藤壺、女三宮、空蝉、紫上、浮舟。

これらの女君達は、出家することによって男の元から去って行く。しかし、『源氏物語』において男君に「私を見捨てていくのか」と思わせるのは、出家ばかりに限らない。

桐壺帝における桐壺更衣。光源氏における空蟬、夕顔、葵上、紫上。薫における大君、入水の浮舟。生別、死別いずれにしても、『源氏物語』において『長恨歌』を用いて描かれる女達もまた、男達を見捨ててその元を去って行くのである。

『源氏物語』の女君の殆どは、男君を見捨てて行ってしまう。出自、才能、美貌、そのいずれをとつても向う所敵なし、理想的な男性と思われた主人公光源氏も、その一方で、結局は女達にことごとく去られてしまうのであった。『源氏物語』は、女が男の元を去って行く物語の連続であつた。

それは、なぜか。

対談に言われる如く、それは「紫式部の源氏に対する」「抵抗」、あるいは「不信任」の表われだったのでないか。『源氏物語』の訳業を以て鳴る女流の双璧の口を揃えるところ、これは看過し難い慧眼と言うべきであろう。

男の元を去る女の物語に、『源氏物語』がこれほどの執着を見せたのは、恐らくこうした、男への「抵抗」や「不信任」と言うべきものによるのであらう。『源氏物語』の『長恨歌』への傾倒も、ひいては羽衣説話乃至は白鳥処女説話への親近も、その一環として考えるべきことと思われる。

男への「抵抗」や「不信任」。それは畢竟するに、『源氏物語』が『長恨歌』、ひいては羽衣説話乃至は白鳥処女説話に対して抱いた思いでもあつたに違いない。人は、束の間男の元を訪れ、やがて天空の彼方へ消え去って行く女の物語の、限らないあわれと美しさに酔う。しかしそれは、本当にそういうものだろうか。なぜ、女は男の元を去らねばならなかったのか。果して去って行つた女達は、幸せだったのか。

『源氏物語』が、白鳥処女説話という、より根源的な物語に見出したもの。それもここに明らかであろう。白鳥処女説話は、すでに見たように、『源氏物語』においては、様々の「変形」を経ながらも、結局は男への「抵抗」、「不信任」を語る物語として実現されていると思われる。

例えば、『源氏物語』は、「源氏」の「物語」とは言い条、その実、その語ろうとしたところは、主人公光源氏の生涯というよりは、むしろそれを巡る、こうした女君達の、一人一人の人生の方ではなかったか。

同じ瀬戸内寂聴と心理学者河合隼雄とは、別の対談で次のようにも述べている。

**河合** 結局、紫式部は光源氏をめぐる一人一人の女の人のことを書きたかったのですね。だから、一人一人の女の人を書くために源氏という男が必要だった。瀬戸内さんの『女人源氏物語』は、まさに紫式部のその意図をくんでおやりになったという印象をもちました。

**瀬戸内** 『源氏物語』といいながら源氏自身の影が非常に薄いですね。いくら読んでも光源氏の具体的なイメージが出てこないんです、のっぺりしているだけで。それが不思議でなかったのですが、源氏というのは狂言まわしですね、結局。

（河合隼雄・瀬戸内寂聴「源氏物語Ⅱ愛と苦悩の果ての出家物語」『続・物語をものがたる／河合隼雄対談集』）

「結局、紫式部は光源氏をめぐる一人一人の女の人のことを書きたかった」。むしろ、「一人一人の女の人を書

くために源氏という男が必要だった」。

この発言は、『源氏物語』を理解する上で、注目すべき見解なのではないか。

確かに『源氏物語』は、主人公光源氏の一生を縦糸にしながら、様々の女君達の話の横糸として、物語を織り成している。その横糸の物語に着目するならば、「源氏というのは狂言まわしですね、結局」というのも、あながち否定出来ないことになるであらう。

そして、その横糸となった物語、「一人一人の女の人のこと」を語った物語の多くが、『長恨歌』、ひいては白鳥処女説話に拠っていたことも忘れるべきでない。それら「一人一人の女の人のこと」を語る物語は、光源氏を「狂言まわし」に据えつつ、繰り返し繰り返し、『長恨歌』、白鳥処女説話の「変形」を語って倦むことがない。その繰り返しにおいて、『源氏物語』が語ろうとしたこと、それは詮ずるところ、男への「抵抗」であり、「不信感」だった、ということになるのではないか。

# 注

(1) 「それは古代国家の人々に伝説としてなお力を持っていた白鳥処女伝説の著しく変形した男女関係にたよところの発想であると思われる」(風巻景次郎「耀く日の宮」『風巻景次郎全集』)。

(2) 「ながき世のうらみ」という表現そのものが、『長恨歌』の〈長恨〉によっていると思われる」(池田和臣「藤壺と長恨歌―引用による主題性の変容―」鈴木日出男編『源氏物語の時空 王朝文学新考』)。

(3) 藤壺に対する光源氏の「長恨」は、藤壺の立後の時点で、こう歌に詠じられていた。

尽きもせぬ心の闇にくる、かな雲居に人を見るにつけても

(紅葉賀)

そして、その出家後も

月のすむ雲居をかけて慕ふともこの世の闇になほやまどはむ

(賢木)

と詠まれている。手の届かない所へ行ってしまったことを、ともに「雲居」と詠んでいる。あるいはこの発想には、楊貴妃の死後の居所「蓬萊」が「楼閣玲瓏五雲起」(『長恨歌』)、「雲海沈沈」(『長恨歌伝』)などと描かれていることが影響しているかも知れない。

(4) 『とはすがたり』において、作者後深草院二条に恋慕するものの拒絶される、「有明の月」性助法親王の文に、「心の中に忘るゝことは、生々世々あべからざれば、我定めて悪道に墮つべし。さればこの恨み尽くる世あるべからず」とあるが、これも同様であろう。

(5) 二条太后太皇宮大式は、「楊貴妃」を題に、

星合ひにかけて契りしことの葉は長き恨みとなりにけるかな

(『二条太后太皇宮大式集』)

と詠んでいるが、これは後の歌群の題に「后」とあることから、『長恨歌』の玄宗を歌ったものと思われる。とすれば、この歌の「長き恨み」も玄宗のものであったことになる。

(6) 『浜松中納言物語』で、唐帝は河陽県の後を愛したが、后に会えなくなると、「天にあらば比翼の鳥となり、地にあらば連理の枝とならん」と「後の御事を思ひ出で」、

契りけん昔の空にたとへても尽きせぬものは我が世とぞ思ふ

と詠む(其二参照)。一方中納言は、后に会えないまま別れることを、「別れ去りなん憂へ、世々を経ともやすむべ

きにあらず」として歌を詠む（巻一）。あるいは、「知らぬ世界の及びなき人に、夢のやうなる契りを結びて、長き世の思ひをも重くなして、この世もかの世もいたづらになしつる心ちする契り」、「尽きせず恋しく」などと后を追懐する（巻三）。河陽県の後造型は、「楊貴妃などのやうに、時めき思されながら」、「楊貴妃、王昭君」などであるように（巻三）、『長恨歌』に拠っているが、いずれにしてもその「長恨」は男のものとして書かれている。

(7) 『大式高遠集』の「ある人」は、「此恨綿々無絶期」を題に、

ありての世なくてのちの世も尽きじ絶えぬ思ひの限りなければ

と詠じている。

(8) 「なけきつ、」（青表紙本）を、河内本、別本の御物本・伝冷泉為相筆静嘉堂文庫蔵本・国冬本は「うらみつ、」としている（『源氏物語大成 校異篇』）。

(9) 「あた た文字清也秘」（『岷江入楚』）。ただし、現代の諸注は、多く「あだ」として、「永久尽きぬ恨みを私の上に残されるにしても、一つはあなたの浮気故だと思召して下さい」（吉沢義則『対校源氏物語新釈』）などと解している。

(10) 『湖月抄』は、「かつは心をあだとしらなん」の本文に注して、「来世までうらみをのこし、つみを得るも皆源の心ゆゑぞ、源の心をあだと思ひて我を恨み給ひそと也」（師説）と言う。ただし、『湖月抄』は、桐壺の「あたかたき」を「あだ河津敵がたき」としている。けれど、これは「江戸時代以後アダと濁音化した」「あた（仇・敵）」（大野晋他『岩波古語辞典補訂版』）の実例か。

付記 本稿成るに当って、平成二十九年成城大学特別研究助成を受けた。